

沢にはシロヨメナやカシワバハグマが花ざかり、特にセキヤノアキチョウジの群生の花ざかりは見事である。暖地に多いノアズキの紫色鮮明な果実は人目をひく。これらの植物の写真撮影に一行は一生懸命である。

この道路には数個の小さなトンネルが連続してあるがこの附近の沢には豊かな植生がみられる。ジンジソウの群生が開花中で素晴らしい一行は歓声をあげた。奥原先生は「ジンジソウだ、これはよかった、よかった、下伊那では遠山谷に少しある……」と話を続ける。クラガリシダ、ウロコノキシノブ、マメヅタ、ゴマナ、ナガオノキシノブ、モチツツジ、セキヤノアキチョウジ、ハコネシダ、イワギボウシ、イワタバコ、ミツデウラボシ、コンテリギ、ヒメカンスゲ、キンミズヒキ、ウラゲエンコウカエデ。

トンネルを過ぎて坂道を上る。樹林内にはトチの大きな木があり、この樹幹にピロードシダ、サジランが着生し群生していてすばらしい。一行は熱心に写真をとる。スズカアザミが路傍に点在している。ナキリスゲを見つけた奥原先生は「秋に実をつけるスゲはこれ一種である。木曽や北の寒い地方には少なく暖かい地方に多い」といわれた。このあたりには暖

帯の植物のコンダが自生している。キョウタキシダ、ナライシダ、フサアジサイ、ガンクビソウ、サラシナショウマ、コシオガマ、キバナアキギリ、シンミズヒキ、ノアズキ、アオキなど。

午前11時20分に折り返し、今きた道を戻り暖帯の植物の多い地点で一行の記念写真を取り、満島にて昼食。午後は1時から3時までを採集予定として計画し、アオネカズラとツクバネガシの稀産種の採集を主目的に出発する。道程は凡そ13kmで自家用車に分乗して出かける。採集地は満島、下山、中井侍、坂部などである。暖帯に分布するアオネカズラは県内では天龍村が産地である。険しい岩壁にあるので採集は困難であったが標本に3株を採集してそれを一行は記録写真におさめる。

中井侍の植物、オオアオツツラフジ、カラスザンショウ、マツカゼソウ、アカメガシワ、アラカシ、ウラジロガシ、ヤブコウジ、テイカカズラ、コバノヒノキシダ、チャセンシダ、マメヅタ、ヤブミョウガ、カニクサ、アオキ。

ツクバネガシは県境地にて国道1号線の路傍にて採集して目的を達成し、天龍川流域の植物採集行を終了して午後3時20分現地解散となった。

佐野泰先生を悼む

車をすこし走らせると、さすがのバラボランテナも高原野菜の畑に吸収されてしまう。そんな野辺山高原で大学農場の片隅に先生は小さな試験区をお作りになった。ヒマワリ、クロユリ、アキノキリンソウ、Campanula 等。高冷地における作物選択の可能性をエネルギー収支の面からみたいと、私はトモロコシとダイズで、先生は野生植物の側から攻め始められた。82年御入院の前年のことである。この試験区で、先生が志向されたこと、それが農学の将来を見通した射程距離の長い仕事であったとは私にもわかる。しかし、先生の研究の何本もある柱の中でどのような役割を考えておいでだったか、その夢を聞くことはもうできない。

30余年まえ、植物ホルモンと休眠の関係を中心とした仕事で研究生生活に入られて以来、精度の高い実験を繰り返してこられた。ホルモンの定量は今も楽しいと伺ったのはごく最近のことになる。また、発芽条件の種あるいは品種間差を花卉、食用作物、高山植物あるいは雑草で克明に調査を繰り返し、リンドウの組織培養も手掛けておいでだった。

こうした研究室内での精緻な実験がお好きだった一方で、氏原さん達との木曽駒ヶ岳の植生調査の楽しさはまた格別のようにだった。ロープウェイ架設前後の千畳敷カールのお花畑変容の記録写真は佐野先生ならではのと言われている。しかも、その変化を固定枠調査で定量的におさえてこられた。

思い付くままに挙げるだけでも、続けて来られた研究の幅の広さ多様さに改めて驚く。氏原さんと私にとって、先生との最も大切な思い出の一つ、クロユリとハイマツを調べて中央アルプスから利尻島へ巡り歩いた日々、スカンジナビア、ヨーロッパアルプス、スコットランドをマツの年間生長量を測って廻った時のこと。それさえも小さく思えてくる。

医師から、少し薬が効きはじめたと喜びの電話を受けたのは8月末、9月7日には、朝日園芸百科の校正が終ったと嬉しそうでした。9月14日、先生の危篤を報せる電話が私を捜しているとは露知らず、データ整理の相談をしたいと王滝地震で遅れた新幹線で京都へ向かっておりました。

(俣野敏子)